

藤女子大学紀要, 第 49 号, 第 II 部: 167-172, 平成 24 年.
Bull. Fuji Women's University, No. 49, Ser. II: 167-172. 2012.

幼稚園教育実習における感情労働

— 笑顔の必要性和その価値を学生はどのように捉えているのか —

高 橋 真由美

Abstract

The purpose of this study is to examine how students understand the necessity of a teacher behaving cheerfully, with a smile, during practical training in a kindergarten. The results showed that the students recognized the need for behaving cheerfully in front of children as follows: 1) to allow the children to enjoy their activities, 2) to build the good relations between the teachers and the children, and 3) to hide their uneasiness or lack of confidence. In addition, it showed that the students found that cheerful behavior led to increases the children's motivation and confidence, thus demonstrating an educational value. However, there was one case in which the student fell into difficulty as she was repeatedly required to display a cheerful smile.

1. 研究目的

幼稚園や保育園で働く保育者の一般的イメージを「明るい」「やさしい」などの単語で表すことに異論を唱える者はいないだろう。職業には、その職務上ふさわしいとされている態度や行動がある。人は、そこから逸脱した態度や行動を見せると非難されるため、自分の職業にふさわしい態度や行動をとろうと努力する。その際、自分の職務に「ふさわしい」感情を感じるように自分の感情を調整しなければならない(武井、2006)。多くの保育者は、その一般的なイメージにふさわしく、いつでも「明るく」「やさしい」態度で子どもや保護者に接するべきと考え、体調が優れなくても、個人的に落ち込むことがあったとしても、「明るく」「やさしい」態度でいるために、自分の本当の感情を抑え、笑顔で子どもや保護者に向かうのである。これは、保育者に限ったことではなく、職業を持つ多くの者が行っていることであろう。

Hochschild (1983) は、このように職務上要請される感情管理を伴う労働を「感情労働」と名付けた。感情労働に携わる人は、職務上必要とされれば、自分の本当の感情でなくても、求められる態度を表出しながら職務を遂行しなければならない

い。Hochschild は、客室乗務員と借金取りという、全く違う二つの職業のどちらにも、感情労働が存在することを指摘している。客室乗務員は、お客様の満足を得るために、傲慢な態度の乗客に対しても、笑顔と温かさのこもった接客を求められ、怒りや無愛想な態度を見せることは許されない。逆に、借金取りは、顧客に同情を感じたとしても、それを隠して冷淡かつ相手に恐怖心さえ抱かせるような態度でお金の回収に努めなければならない。すなわち客室乗務員は、乗客が終始心地よいフライトができるように、借金取りは、債務者に恐怖心を抱かせるために、自らの感情を管理しながら業務にあたるのである。

この概念を保育者の仕事にあてはめて考えてみたい。上述したとおり、保育者は、子どもが安心して生活が送れるように、明るくやさしい態度で子どもと日々の生活を送る。私生活で悲しいことがあっても、暗い顔を見せないために感情を調整して笑顔で子どもの前に立つ。また傲慢な保護者の態度に腹が立ったとしても、怒りをぶつけるのではなく、落ち着いた態度で笑みさえ浮かべながら接する。このように、保育者の仕事もまさに感情労働として捉えることができる。

Hochschild が感情労働の概念を提唱して以来、

サービス業、医療、看護、福祉、教育等の分野で、感情労働にまつわる研究が行われてきており、最近では、保育者の仕事にこの概念をあてはめて論じるものも見られるようになった。

岩崎（2006）は、保育者が親子支援を行う過程には、どのような困難が待ちうけているのか、またそれを乗り越えるために自らどのような打開をはかっているのかを、感情労働の視点を交えながら考察している。

太田ら（2008）は、保育実習を経験した学生に対する聞き取り調査を実施し、感情ワーク（実習は労働ではないため、感情ワークという言葉で表している）が消極的にも建設的にも働くことを指摘している。学生は指導保育者の目を気にするあまり、子どもへのまなざしを十分に注ぐことができず、学びが浅くなってしまう場合があり、逆に指導保育者からの好意的な雰囲気や何気ないコミュニケーションというサポートを受けた場合、子どもへのまなざしも十分注がれ、実りある学びにつながるというのである。

諏訪ら（2011）は、日常の保育場面での保育者の様々な行為に感情労働という概念を照らし合わせてみた時に、保育者の専門性が見えてくる可能性があることを指摘している。

上月（2011）は、実習の評価票総合所見欄の中に記述されていた、「笑顔」「明るさ」「元気さ」など明朗な表情や態度に関してのコメントを分析し、福祉施設実習よりも、幼稚園・保育所実習において、より明朗な態度が求められていること、保育所では、「指導案」「保育技術」と同様に「笑顔」が評価の対象となっていることを明らかにしている。

以上のように、先行研究では、保育の仕事に感情労働の概念をあてはめることで、保育の仕事の困難性や専門性、実習における学生の学びを充実させる要因等について明らかにされていることがわかった。特に上月の報告からは、「明るく」「元気に」「笑顔でいる」という保育者のイメージは、世間一般で抱かれているだけのものではなく、保育職に従事している者の中にも、そのような態度を表出することが必要であると思っている者が多いことを読み取ることができる。

このような考えは、保育者養成過程における講義や演習、そして実習の経験によってその基盤が形成されていくのではないかと考える。では実習

を行う中で学生は、この明朗な態度の必要性和価値をどのように感じているのだろうか。本研究は、保育者を志す学生が、実習において、「明るく」「元気に」「笑顔でいる」ことの必要性をどこで感じているのか、またそのように感じる要因はどこにあるのかを明らかにすることを目的として行う。

2. 研究方法

実習において学生は、「明るく」「元気に」「笑顔で」というような明朗な態度の必要性をどこでどのように感じ、そのように感じるようになった要因はどこにあるのかを明らかにするために、本研究では、実習後に学生に課題として提示したレポート記述内容の分析を行った。研究対象は、2011年度に幼稚園教育実習を行った3年次生94名である。レポート課題は、「幼稚園教育実習を終えて、感じたこと、学んだこと、今後の課題について」を問うものであった。実習終了後に2週間の作成期間を与えたのち、提出してもらった。

本研究では、提出されたレポートの記述の中から、「明るさ」「笑顔」「楽しさ」を表出することに関連した記述を抽出した。その結果、16名のレポートにそれらの記述がみられることがわかった。

3. 結果

3-1 「明るさ」「笑顔」「楽しさ」が必要であると思うようになった理由

レポートから抽出した「明るさ」「笑顔」「楽しさ」などの明朗な態度を表出することに関する記述を分析した結果、それらを表出しようと思うようになった理由は、「子どものためを思う気持ち」、「子どもとの関係性構築を望む気持ち」、「自分の態度変容のため」の3つのカテゴリーに分けることができた。以下では、その3つを記述内容とともに説明していく。

(1) 子どものためを思う気持ち

〈記述1〉

先生方は、子どものことを第一に考えていて、どんなことにもとても楽しそうに取り組んでいました。保育者自身が楽しそうにしていると
きっと子どもたちも楽しんでくれるということ

を今回の実習で実感できました。

〈記述2〉

保育者が楽しく保育を行っていると、子どもたちも楽しく、笑顔になれると思った。職員室にいても皆さんは常に笑顔で、その笑顔を見て子どもたちも笑顔になっていました。

〈記述3〉

先生方の子どもたちと一緒に遊ぶ時には、本当に楽しんでいる姿が印象的でした。自然な笑顔と豊かな表情には驚きも感じました。もし子どもたちに元気がなかったとしても、先生の明るい表情で子どもたちも遊びを楽しむことができるのではないかと思います。

「子どものためを思う気持ち」が見られた記述をみると、明朗な態度の表出は、「子どもを楽しませるため」であると、学生が捉えていることがわかる。〈記述1〉では、保育者たちが子どものことを第一に考え、どんなことにも楽しそうに取り組む姿を見て、保育者が楽しければ子どもたちも楽しむことができることを実感することができたとしている。また〈記述2〉では、笑顔を絶やさない保育者のもとで生活する子どもたちの笑顔を間近で見ることで、笑顔の大切さを感じている様子が見られる。〈記述3〉では、保育者たちの本当に楽しそうな様子を目の当たりにし、たとえ子どもたちに元気がなくても、保育者の明るい表情が子どもたちを楽しませる方向へ向かわせるのではないかと感じている。以上のように、記述1～3からは、子どもを楽しませるためには、笑顔や明るさ、楽しさの表出が必要であると実感を得ている学生の様子が伺われる。

また、〈記述4〉のように、単に「子どもの笑顔がみたい」という理由から、自ら笑顔になれたことについて記述しているものも見られた。

〈記述4〉

毎日実習は大変でしたが、笑顔で乗り切れたのは、子どもの笑顔が見たいという気持ちがあったから。

一方、明朗な態度の表出に、教育的な意味合いを感じている記述も見られた。

〈記述5〉

どんな場面に遭遇しても、子どもを笑顔で、時には悲しい気持ちを共有しながら受け入れ、理解して接することで、人として大切な心を育てることができるのだと考えている。

〈記述6〉

子どもが意欲や自信を持てるように笑顔でほめる。言葉だけでなく、表情で子どもに伝えることや感情を子どもに訴え伝えることも、子どもの学びとして大切なこと。

〈記述5〉では、常に笑顔でいることや悲しい気持ちを共有して子どもを受け入れていくことで、子どもの心を育てることができるということを、学んでいる。また〈記述6〉では、笑顔でほめることが、子ども意欲や自信につながることを感じ、表情や感情をつかって子どもに訴えかけることが大切なことであると理解している様子がうかがわれる。このように学生は、明朗な態度が単に「子どもに楽しい思いをさせる」ことにとどまらず、「子どもの心を育てる」ことにもつながる有効な手段であると学んでいることがわかる。

(2) 子どもとの関係性構築を望む気持ち

記述7～9は、学生が子どもとうまくいかないことに悩み、その解決方法として、「笑顔」を意識し、「楽しむ姿」を表出しようと努力した結果、子どもとの距離が次第に縮まっていったことを実感している例である。

〈記述7〉

子どもとうまく接することができずにいました。このままではいけないと思って子どもに積極的に話しかけ、笑顔で接することを心がけました。すると子どもたちも私に話しかけてくれる回数が増えたり、登園したときに駆け寄ってくれる子、お母さんと離れたがらない子が、お母さんと離れお部屋まで行けたりとうれしい出来事がたくさんありました。

〈記述 8〉

なかなか打ち解けることができなかった時、担任の先生から笑顔で話しかけること、名前を早く覚えて呼ぶことで打ち解けやすくなるということを教えていただき実践したところ、日をおうごとに子どもたちも私の名前を覚えてくれ、一緒に遊ぼうと言ってくれる子が増えていった。子ども達は元気に遊んでくれる先生が好きなので、子どもと一緒になって元気よく遊ぶことで学ぶことがたくさんあることも教えていただいた。

〈記述 9〉

先生が楽しんでいる姿を見れば子どもも楽しめるという事も教えていただいたので、うまくいかないと感じた時には、自分が楽しむことを意識するように心がけていました。それを心がけるだけでうまく子どもとかかわれた事も何度もあり、とても素敵なことを教えていただいたと感じました。

〈記述 7〉では、笑顔を意識してかかわることにより、うれしい出来事が増えていった喜びを感じている様子が伺われる。〈記述 8、9〉では、共に担当保育者からのアドバイスにより、笑顔でいること、明るくいること、元気でいることを実践してみた結果、子どもとうまくかかわりが持てたという実感を得た様子が見られる。以上のように、学生は、子どもとの違和感を解消する際に有効な手段として、明朗な態度を表出することの必要性を感じていることがわかる。

(3) 自分の態度変容のため

〈記述 10〉

どのような状況でも笑顔で自信を持って子ども達と接することができるよう努めたい。想定外の事態でも、保育者が不安な表情を見せては子ども達も不安にさせてしまう。いつも安心した環境で生活することができるよう、子ども達と関わりたい。

〈記述 11〉

「子どもはとても敏感なので先生の緊張や不安、自信のなさはすぐに伝わってしまいます。先生自身が楽しんで子ども達の前に立ると良いですね」と指導していただき、そこから私自身が楽しんで笑顔で子ども達の前に立つよう意識すると、今までとは子どもたちの反応が全く違い、子ども達がたくさん笑顔を見せながら私のやることに反応を見せてくれるようになった。

〈記述 12〉

先生からのアドバイスをいただき、私はゲームを進めなくてはという一心から、ただ淡々と進めていたことに気がきました。そこから私は、例え緊張しても絶対に子ども達の前では笑顔で明るくいなくてはいけないと思い、常に笑顔で明るく心がけました。すると子どもの反応が前と少しずつ変わってきたように思いました。常に笑顔でいることができ、そうすると自然と子ども達の前に出ることが楽しくなってきました。

記述 10～12 は、主に設定保育の時間について述べているものと思われる。設定保育は、学生にとっては、とても緊張する時間である。どんなに案をしっかりと練ったとしても、うまくできるだろうかという不安から、緊張状態に陥ってしまうのである。そのような中、学生は、自信のなさ、緊張、不安を隠すための手段として、「笑顔」「楽しさ」を意識して表出することを、自分で気付いたり、担当保育者からアドバイスを受けて実践した結果、今までとは違う子どもの反応を感じ、子どもの前で何かをすること自体が喜びにつながる実感を得た様子が伺われる。以上のように、学生は、自己の感情のコントロールのためにも、明朗な態度を表出することが有効な手段であることにも気付いている。

3-2 「明るさ」「笑顔」「楽しさ」を表出することの難しさ

3-1 では、明朗な態度を表出したことが、子どもの変化につながることを実感し、その効果を認めている様子について述べてきたが、記述の中には、

明朗な態度を求められたことによる戸惑いを記しているものもあった。

〈記述 13-1〉

明るくみせるということがとても難しいと感じました。子どもの前に立つとき、「もっと明るくしたほうがいいよ」というようなことを言われました。それまで自分は暗いとは思っていません、明るい表情で子どもと関わっていると思っていました。ですが、まだまだ足りないのだということがわかりました。

この記述では、学生は自分では明るくしているつもりであったのに、さらなる明るさを求められ、戸惑っている様子が見られる。しかしながら、アドバイスを前向きに捉え、明るさを表出しようとがんばろうとする気持ちも読み取れる。

〈記述 13-2〉

いつもより表情を明るくして、大げさに振舞ってみました。しかし終わったあとの反省会でまだ足りないと言われました。「多少暗くても、子ども達は魅力に気づき、ついてきてくれるかもしれないけど、保護者の方から見ると、やはり明るい先生の方が印象は良いよ」ということでした。「もっと表情やリアクションを大げさにすると子どもがひきつけられるよ」と言われました。

そこでこの学生は、自分で「大げさ」と思うほど、自分をコントロールし、明るさの表出を試みた。しかしながら、保育者は、子どもに対しては多少明るさがなくても大丈夫であるが、「保護者は明るい先生が好きである」ということを伝え、子どもに対しても「表情やリアクションを大げさにすること」を求めている。

〈記述 13-3〉

実習最終日には反省をしてくださり、「明るさはまだ足りないけど、そこはこれからどう見せたら明るくなるか研究していったら良いと思う」と言われた。簡単にできることではありませんが、少しずつ自分の持っている明るさを出していければ良いと思います。

学生は、実習最終日にも、まだ明るさの表出が足りないことを指摘されている。「どう見せたら明るくなるか研究して」という言葉には、「保育者は明るくなくてはならない」という職業イメージのもと、演技をしてでも、そのイメージに合わせていかなければならないというメッセージが含まれているように感じる。この状況は、実習の場であるため「感情労働」とは言えないが、この過程は、学生にとって、辛い感情ワークであったと察する。これら一連の記述からは、学生が感情を調整して、明るく見せるために努力していても、それが認められず戸惑う様子を読み取ることができた。

4. 考察

この研究では、実習に関する学生のレポート記述の分析から、学生が「明るさ」「笑顔」「楽しさ」などの明朗な態度を表出する必要性をどこに感じているのかを明らかにしてきた。

3-1 で述べたように、学生は、明朗な態度を表出することが、様々な子どもの変化につながることを実感し、その効果を認めている様子がみられた。その記述を、今一度注意深く見ていくと、学生が明朗な態度を表出することに、以下のような教育的価値を見出していることに気付く。

- ①子どもの心を明るくし、活動へ向かわせる意欲を育てる
- ②子どもに自信をもたせる
- ③人として大切な心を育てる

学生は、保育者が楽しい表情や笑顔を見せると、子どもも同じように笑顔になり、活動を楽しむ様子が見られることを、自分の経験、保育者たちの様子を観察すること、保育者のアドバイスを実践してみることなどを通して実感している。また、明朗な態度を表出することが、子どもに自信をもたせることや、人として大切な心を育てることに繋がると気付いた者もいた。これらの気付きにより、学生達は、明朗な態度を表出することは教育的価値のあることであるととらえ、自分から積極的にその行為を行っているのである。

伊佐（2009）は、小学校教師を対象とした調査から、教師は子どもの心に働きかけるために積極的に明るさや笑顔を表出したり、烈火のごとく怒

る様子を見せたりすることが教育効果をあげるための手段であると認識しており、より積極的な意味合いの下に感情労働を行っている」と指摘している。もちろんそこには、「望ましい教師像」というイデオロギーによる強制力もあるが、そのように他律化された感情規制であったとしても、そこに教育的価値を見出し、感情労働を戦略的にやっているというのである。

伊佐が指摘するように、本研究でも世間一般の、「望ましい保育者像」により、明朗な態度の表出を強いられている側面はあるのかもしれないが、それでも学生達は、子どもにとって良い保育がしたい、子どものことを第一に考えた保育者になりたいという願いから、自立的に感情ワーク（感情労働）を行っているのである。この経験は、実際に保育者になった時にも学生たちの保育者としての在り方に関する指針となっていくものになると考える。

しかし一方では、記述13のように、明るさを求められ続けた結果、戸惑いを覚える学生が存在することも明らかとなった。

感情労働の研究でも、感情労働が行き過ぎたものになると、感情操作による疲弊感がバーンアウトにつながるなど、その負の側面が議論されているものも多い。記述13の例は、バーンアウトに及ぶまで深刻なものではないが、「明るくふるまう」ことが必要だと理解しているが、なぜ必要なのかを実感として得ることができなかった例である。

このように、同じように明朗な態度を求められても、その良さが実感として、刻まれるか否かに分かれるのには、どのような要因がからんでいるのだろうか。今回の調査は、単に学生のレポート記述内容のみを分析対象としたため、実習中にどのような出来事があり、その時にどのように感じたのかなどの詳細までは明らかにできていない。そのため、確かなことは言えないが、明朗さを表出する必要性を実感している学生は、園の保育者たちに親切に指導され、自分を出すことができた状態で実習に臨んでいる様子がレポートから垣間見られた。それに対し、明朗さを表出する必要性がわかっている、それを実感するまでに至らなかった学生は、とにかく「大げさに、リアクシ

ョンよく、明るくする」ことを形からやってみるようにならざるを得たような印象を受けた。これは、上記した太田ら（2008）の担当保育者の指導の在り方や雰囲気、感情ワークが消極的にも建設的にも働くといった指摘と重なるように感じる。

本研究では、明朗な態度を表出することが、「保育者」という職業の望ましいイメージによって強制されていることはあるかもしれないが、多くの学生が明朗な態度の表出をすることに教育的価値を見出し、積極的に行おうとしている様子が見られた。しかしながら、レポート記述の分析という方法をとったため、学生の経験の詳細がわからなかった。またレポートは成績をつけるための材料であることを学生が意識して書いているためか、辛かったことに関する記述があまりみられなかった。そのため、今後は、インタビュー調査等を実施し、詳細なデータを収集することで、明朗な態度の表出に対して学生がどのように必要性を感じていくのか、具体的なプロセスを明らかにするとともに、どのような指導のもとで実習を重ねれば、学生はその必要性をよい意味で実感することができるのかを明らかにしていきたい。

引用文献

- 武井麻子 2006 「ひとの仕事はなぜ疲れるのか——感情労働の時代」大和書房 p.18
- Hochschild, A. R., 1983 「The managed heart: Commercialization of human feeling」University of California Press. 石川准・室伏亜紀訳 2000 『管理される心：感情が商品になるとき』世界思想社
- 岩崎美智子 2006 「他者を支援するということ——感情労働者としての保育者の困難と危機」日本乳幼児教育学会第16回大会 研究発表論文集 pp.77-76
- 太田光洋、高木勲、中山智哉 2008 「感情労働の観点からみる保育実習における学生の学び」保育士養成研究(26) pp.39-46
- 諏訪きぬ、戸田有一、中坪史典、高橋真由美、上月智晴他 2011 「保育における感情労働——保育者の専門性を考える視点として」北大路書房
- 上月智晴 2011 同上 pp.149-152
- 伊佐夏実 2009 「教師ストラテジーとしての感情労働」教育社会学研究 第84集 pp.125-144